教点連ニュース　平成 21 年度 第３号　No.11

＜平成 22 年１月 20 日発行＞

【平成 21 年度 第２回セミナーのご報告】

去る 2009 年 11 月 29 日（日曜）の午後、新館となった日本ライトハウス情報文化センターにおいて、平成 21 年度第２回セミナーが行われました。インフルエンザの影響で参加をキャンセルされた方もいらっしゃいましたが、当日は 87 名と、多くの方にご参加いただきました。

テーマは視覚障害児童・生徒の学習環境について取り上げ、それに関連した講演、および実際に現場で関わっておられる先生からの事例報告と、それを受けてパネルディスカッションを開催しました。また、今回は大阪府/大阪市教育委員会からもご後援をいただきました。

『天文学入門～私たちの宇宙　マルチモーダル図書』について　　嶺重 慎 氏

前半の講演では、多媒体で製作されたマルチモーダル図書（注１）『天文学入門～私たちの宇宙』を著者嶺重 慎(みねしげ　しん)さんから、その製作秘話と言うことで、製作段階での苦労話、感動話をお話いただきました。

(注１）１冊の書籍が、点字図書・録音（デイジー）図書・活字図書・電子ブック図書など複数の媒体で同時に製作されており、年々そのケースも増えてきています。また、「天文学入門」では触図も多く製作されています。

一般的には、天体は視覚的な分野であり、とりわけ視覚障害者には理解しにくいものとされてきました。しかし、「宇宙のことを視覚障害者にももっと知ってほしい」という著者の思いから今回他媒体での発行が実現しました。

製作方法として、まず、基礎となる墨字の原稿を作り、それを他の媒体で読んでも分かるように修正していきました。また、星の見え方、惑星の状況など、触図だけを触っても意味を理解することはできません。そこで、本文とは別にていねいな図の解説が加えられていることもこの図書の特徴です。ただ、視覚障害者によって触図を読み取って理解する時に個人差があるため、完成するまでに複数のモニターの方と何度も議論を重ねられたそうです。

このように、何度も試行錯誤が繰り返され、１冊の図書が誕生しました。

事例報告　　大阪府八尾市立安中小学校 弱視学級担任 中本由美氏

次に、大阪府八尾市立安中小学校で弱視学級の担任をされている中本由美（なかもと ゆみ）氏から、事例報告として、日ごろの指導方法を初め、各科目の取り組みについて発表いただきました。担任をされているお子さんは、小学校１年生から目の見える児童といっしょに点字を使って学習しています。授業では弱視学級の先生と生活介助員と担当を決めて授業の補助をされています。中でも、理科の資料の中に写真で説明されていて言葉で説明しても分かりにくい場合は、紙粘土を使って説明したり、算数で立体図形を説明する際にも、実際に立体模型を用意するなど、指導の上で多くの工夫やアイディアを取り入れられており、先生の熱意が伝わってくる印象深いお話でした。

パネルディスカッション

大阪府立視覚支援学校 松下幹夫（まつした　みきお）氏

点訳ボランティア「野菊の会」 藤沢郁子（ふじさわ　いくこ）氏

大阪府八尾市立安中小学校 弱視学級担任 中本由美氏

後半のパネルディスカッションでは、中本さんにも加わっていただき、巡回指導を行っている大阪府立視覚支援学校の松下幹夫氏、資料集や副読本の点訳をされている点訳ボランティア「野菊の会」の藤沢郁子氏から、これまでの経験や感じていることをお話いただきました。

安中小学校の生徒の場合、教科書以外の教材の多くは担当の先生が準備し、その他の副教材、本人が読みたい本などは地域のボランティアサークルにお願いしたり図書館から借りています。特に、授業で使う教材については、予め担当の教員から予定表をもらい、それに応じて準備を進めているとのことでした。また、歩行訓練や、レーズライター・そろばん・音声パソコンなどの用具の使い方については、大学や特別支援学校の先生から指導を受け、段階に応じて必要な技能も習得しています。学習以外の面では、高学年になるとお互いに異性を意識するようにもなり、これまではなかった友達とのコミュニケーションの課題が出てくるのではないか、と危惧されていました。

藤沢さんからは、視覚障害児童が他の生徒と同時に教材を手にすることができるように、学校または教育委員会から点訳者に早期に原本を届けてほしいと懇願されていました。

この他、参加者から質問・意見が出され、いかに授業に間に合うように教材を準備すればよいのか、クラスでの席替えの注意点など学習支援の在り方について、意見交換が行われました。

最後に、高橋實理事より、次回のセミナー（平成 22 年度第１回セミナー）は、東京・日本点字図書館で開催されることを確認し、閉会しました。

【点字教科書の普及に関する第４回意見交換会のご報告】

日時：2009 年 12 月７日 10～12 時　　場所：文部科学省７Ｆ　教科書課連絡室

参加者：新津課長補佐（進行）、美濃専門官、吉田調査官、大内進（参考人。特総研上席総括研究員）、香川教授、太田副参事、原田教諭、高橋理事長（橋本京子）、加藤、牟田口（敬称略）

今回は、国立特別支援教育総合研究所（以下、特総研）上席総括研究員の大内進氏が参考人として出席され、同研究所運営の視覚障害教育情報ネットワークや、同氏が進められている点字教科書マニュアルの内容なども報告されました。主な内容は次のとおりです。

１．弱視等児童生徒に係る調査の結果

当初から強く要望しておりました、点字教科書を必要とする児童生徒の実態調査について、９月１日現在で各学校について調査し、12 月４日に発表したとの報告がありました。調査は、すべての、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校について学校への問い合わせとして実施されました。対象は、弱視等児童生徒（視覚障害により「眼鏡などの使用によっても

通常の文字、図形などの視覚による認識が困難な程度のもの」とし、現に点字教科書または拡大教科書を使用・希望するなど、学校において弱視等児童生徒として把握している場合も対象とされています。）

＊調査結果の概要

点字教科書	通常学級	小 8	中 5	計 13 名	
	特別支援学級	小 40	中 6	計 46 名	（弱視学級等）
	特別支援学校	小 138	中 98	計 146 名	（盲学校等）
	高等学校	通常学級 8 名、特別支援学校 116 名、計 124 名			
拡大教科書	通常学級	小 522	中 241	計 763 名	
	特別支援学級	小 344	中 112	計 456 名	
	特別支援学校	小 143	中 163	計 306 名	
	高等学校	通常学級 118 名、特別支援学校 444 名、計 562 名			

点字教科書、拡大教科書を使用していない数は未調査でしたが、「使用していない理由」が調査されており、「点字教科書未使用の理由」として、「本人が点字使用の指導を受けていないため」（通常学級小中高６校）、「点字教科書・拡大教科書共通の未使用理由」として、「本人・保護者が使用を希望していないため」（小・中に多い）、「入学・転学の際、障害の状況を把握できなかったため」「教科書を入手する手続きが分からなかったため」（高に多い）などとなっていました。

教科書課が把握している点字教科書提供数は平成 20 年度ではありますが 17 名とされており、今回の調査が 21 年度 13 名と異なっています。教点連で把握している数は年度の違いはありますが 20 名でもっと多いはず、と考えています。

この差について、特総研の大内氏は、「推定される理由の一つに、特別支援学級に所属していても実質は通常学級のように扱われているケースも少なくないのではないか。」と述べられています。委員からは、「点字指導の問題もある。」「調査票に“弱視等”とあるので、点字は含まれないと判断されてしまうこともあり得るのではないか。」という意見、そして「通常学級及び特別支援学級において、点字教科書を必要とする児童生徒数と実際に提供されている科目の状況をぜひ調査してほしい」という要望が出されました。

２．点図サンプル集について

前回に、点字教科書の製作のマニュアルなども必要ではないかとの意見を踏まえて、特総研で取り組んでいる資料について大内氏から説明がありました。盲学校用点字教科書の「編集資料」では触れられていない触図の扱い等について、例えば原図と触図を見開きにして、基本的な触図化の扱いから説明した解説書案（墨字、原案３分冊）が提示されました。どのような意図の図かを含む実際の触図製作にむすびつく資料として注目されます。委員からは、「盲学校においては、配慮をすることを前提にしているので墨字教科書との違いがあっても問題ないが、一般学級のほとんどは墨字の教科書のみで指導が行われ、「視覚障害児への配慮」が「晴眼児とのギャップ」

となってしまうこともある。」「ビジュアル的なものが増えて多様化し、先生がどう教えるかわからず、触図化が困難なケースが増えている。」「晴盲が学び合うことから、点墨併記などの配慮も必要。」などの意見もだされました。

３．データの共有化について

特総研の「視覚障害教育情報ネットワーク」の利用の可能性もあるので、その説明が行われました。このネットワークは、特別支援学校（盲学校等）及びその推薦ボラ団体を対象としており、公開できるデータの共有化が図られています。また、各校で先生が工夫を重ねてきた教材教具を共有するための情報の場としても利用されてきています。

ただ、教点連が直接利用する場合、自由にダウンロードとはできません。点字データについては、このネットワークでは対応していない「課金」やセキュリティの問題があります。それで、現時点でも利用可能な、「点訳されているデータで入手できる点字教科書リスト」など公開されてもよい部分については、このネットワークを利用していくことを検討していくことになりました。

なお、データ管理運営機関の設置について確認しましたところ、文科省としては、既に 2009 年２月に業者に委託をして、出版社から小中の墨字データについては 100%提供を受けている、無償給付対象の全施設団体へお知らせした、とのことでした。これは、拡大教科書について、PDF ファイルでの提供が始まっており、テキストデータの利用が始まっていることは知っていましたが、「データ管理運営機関」の解釈が異なっていた面がありました。いま、使い勝手をよくするための改良の経費が予算化され、高等学校の墨字データの検討も始まっていますが、この「点字データ共有」については含まれていません。

４．その他

墨字は４月に出されて使用されてきている補助教材について質問があり、入札し製作されたものの、その情報が伝わっていなかったり、点訳には数ヶ月かかることを踏まえて、見本本の段階で発注するなどの配慮が是非必要との意見が出されていました。

次回は１月に開催される予定です。

【平成 21 年度 第３回理事会記録】

日時：平成 21 年 11 月 29 日（日）　11:00～12:00

場所：日本ライトハウス情報文化センター　４F 会議室１・２

参加者：田中、池村、奥野、加藤、込山、鈴、高橋實、長岡、野々村、原田、古谷、牟田口

①点字教科書製作状況の実態調査を実施

※会員の皆様のご協力により調査の結果が出ましたので、同封しておきます。

②次回理事会を２月１３日に日本点字図書館で開催する。議題は春のセミナーなど。

【教点連 ボランティア団体のご紹介】

ボランティアサークル「つつじ点訳友の会」

代表者　古谷　妙子

つつじ点訳友の会は、1976(昭和56)年1月、東京都練馬区で当時行われていました点字講習会終了生によって誕生し、34年になります。

当会は、学生さんの教科書を中心に副読本・各種問題集・針灸医療書・情報処理・数学書・語学書等、数多く引き受けています。点筆からカニタイプ、そしてパソコン点訳となりました今日、点字データはいつでも気軽にインターネットを通じてご利用可能になりました。特に学生さんからの依頼物については、メール添付でのデータ送信はとても重宝されています。

ホームページを開設してからは、南は沖縄、北は北海道、学生さん始め、学校・一般事業所からの点訳依頼に、できる限りの依頼を引き受けています。また、時には海外（アメリカ・韓国等）からも依頼が有り、メール添付でデータをお送りしています。近年は、外国語を選考される方が多く独語・仏語・イタリア語、数は少ないですが韓国語の依頼も有ります。

現在会員数90名、実働は3分の2程の人数で点訳をしています。会員の高齢化・昨今の社会情勢に伴い点訳者も減少しつつ有ります。長く続けられていました練馬区の点字講習会は、30回で一旦終了されましたが今後のことを考え、「つつじ」では一般公募による独自の「点訳者養成講座」(1年間)を開いています。中堅会員が指導しており、まもなく第3回目の講習会が終わろうとしています。春からは正式会員として日本語を主として点訳活動に参加されつつ、半年後に英語講習(半年間)を受講して頂きます。新鮮かつ熱い情熱でつつじを継承して下さるのを念じています。

昨年は、「エーデル」による作図指導を推し進めました結果、未熟ながらも作図点訳者も増えてきています。この陰には、外部の研修会等に参加し、得た情報を会員に報告、そして、点訳資料として多いに活用させていただいているお陰と感謝しています。終わりのない点訳活動、点訳に要する時間より校正に時間を費やすことの多い作業ですが、1点1点積み重ねていくつもりです。

以上

発行日：平成22年1月20日
発行所：NPO法人全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会
発行人：田中徹二
連絡先：（社福）日本点字図書館　担当：田中・松本
〒169－8586 新宿区高田馬場1-23-4
Tel：(03)3209－0241 Fax：(03)3204-5641
E-mail：matsumotom@nittento.or.jp
振込口座番号：0180－7－262151